

国分寺の回廊形式と伽藍配置

有 賀 祐 史

— 論 文 要 旨 —

天平13年の詔により各国に建立された国分寺は、伽藍配置や寺域範囲などに多様性が認められることが指摘されてきた。近年、国分寺の発掘調査の増加によって、中心伽藍域を区画する回廊の形式についても明らかになってきている。その中には、平城京諸大寺に通有な複廊形式の回廊をもつものが確認されている。また、伽藍配置において回廊がどの建物を囲み、どの建物を結ぶかは、伽藍の中で塔がどこに配置されるかと有機的に結びついて、伽藍配置の形式や変遷を考察する上で重要であると考えられる。そこで、本稿では伽藍配置などにおいて諸国で多様性が認められる国分寺の造営背景を探るため、回廊形式に着目し、国分寺の伽藍造営の一端について論じる。

先行研究においても国分寺の伽藍配置の分類が示されてきたが、本稿でも塔と金堂の位置と回廊の関係から三大別した。さらに回廊が取り付く建物や塔の位置などによって10形式に細別し、分類を行った。次に、回廊形式について検討し、複廊・単廊・その他の圍繞施設があることを確認し、礎石建ちの複廊と単廊のみを比較すれば数量的にはそれほど差がないことが判明した。ただし、複廊は塔を回廊外に配置した伽藍配置（I A・B式）をとるものにしか採用されず、その他の伽藍配置をとるものには掘立柱式・築地塀による区画施設が広く認められた。

I A・B式の伽藍配置は平城京諸大寺で通有な伽藍配置で、複廊の採用も国家鎮護の思想に合致した新しいスタイルの伽藍造営によってもたらされたものである。したがって、複廊をもつI A・B式の伽藍配置は、国分寺建立時において最もふさわしい伽藍配置であって、平城京諸寺院の伽藍造営に影響を受け、諸国の国分寺が建立されたことを示す。その一方でそれ以前の伝統を受け継いだ伽藍と回廊をもつ国分寺も認められることが鮮明となった。

1. はじめに

天平13(741)年、国家鎮護の思想のもと各国に国分寺・国分尼寺の造営が企図され、天平勝宝8(756)年には聖武天皇の一周忌齋会に必要な道具が26国に頒下されたとされる。発掘調査によって明らかにされる国分寺はその造営理念が同じであるはずなのに、伽藍配置、寺域範囲、使用された軒瓦などには諸国で多様性が認められている。とりわけ、伽藍配置には複雑な諸形式がみられ(斎藤1996)、その造営の背景が明らかになっているとはいいがたい。国分寺の造営資力や経営が各国でまかなわれたのであるから、それぞれに個性があつてしかるべきではあるが、奈良時代社会を特色づける国分寺造営の状況を細やかに検討することは有益であろう。

近年、国分寺・国分尼寺の史跡指定や環境整備に伴う発掘調査が増加し、中心伽藍をはじめ、寺院維持関係諸施設の状況も明らかになってきた¹⁾。その中で、中心伽藍域を区画する回廊は、平城京諸大寺に通有な複廊をもつ国分寺が複数確認されている。そこで、国分寺にみられる伽藍配置の一属性として、回廊形式をとりあげ、その一端を考えてみたいと思う。

2. 研究略史と問題の所在

多くの先学によって古代寺院に関して中心伽藍域を構成する金堂・塔の位置や、それらを囲う回廊の取り付き方などから伽藍配置が分類され、さらに変化の要因について追究され、そこに国分寺建立の位置付けもなされてきた。

はじめに、国分寺の伽藍配置についての代表的な研究を概観していく。

斎藤忠は、伽藍配置を回廊と金堂または講堂との接続関係や塔の位置などから分類整理し、国分寺の伽藍配置が単純なものでなく、かなり複雑な諸形式があることを指摘している(斎藤1972・1996)。

森郁夫は古代寺院の伽藍配置変化の要因を記す中で、諸先学の成果の共通点を「伽藍配置の大きな変化が四天王寺あるいは山田寺を代表例とする塔・金堂の縦置形態から、法隆寺・法起寺を代表とする横置形態への移行、そして、回廊内金堂前面に東西両塔を置く薬師寺式への変化、さらに両塔が回廊外に置かれる大安寺式への発展、それらを大きな変化ととらえていること」とした(森1998)。したがって、聖武朝の国分寺においては大安寺式の伽藍配置が最もふさわしいと考えられるが、国分寺の伽藍配置は一定せず、その解明は今後の重要な課題と位置付けている²⁾(森1998・2009)。

一般的に、古代寺院の伽藍配置の変化をとらえる時、

金堂(仏像)に対する塔(仏舎利)の位置の変化が論じられることが多い。四天王寺式では塔を最も尊重して金堂の前面中央に置いていたのが、法隆寺式では両者を対等に並置し、大安寺式や東大寺式になると、金堂が中心に置かれ、塔はシンボリックに回廊外に置かれたとされる。筆者も大枠ではそのような変化の過程で伽藍配置の変容を理解しているが、国分寺にはこの変化の過程ではとらえられない伽藍配置の採用形態があることは明らかである。

上原真人は、古代寺院を中門から発した回廊の閉じかたから四種に大別し、さらに細別し分類を行っている(上原1986)。国分寺は七重塔が最も重要な地位を占めており、多くの国分寺では回廊の外に塔を置いている。塔の信仰が衰退したから塔を回廊外に置いたのではなく、金堂前面に儀式空間を確保するという積極的な理由の結果であると述べている³⁾。

一方で、須田勉は塔院を形成する国分寺があることや、塔が先行して造営される事例を挙げ、塔を重視する思想を優先した結果、国分寺の伽藍配置が生じていることを述べている(須田2011)。さらに、国分寺は「造塔之寺」であり、金字の最勝王経一部を納置する七重塔は国分寺の伽藍の一部ではなく、また国分尼寺の付属でもなく、むしろ両寺を統率するかたちで創建されたとするなど(田村1981)、国分寺の伽藍配置を整理する場合、塔の位置をその主要な指標とすべきことは先学の一致した考えといえよう。

興味深い研究として、八賀晋は国分寺の伽藍配置を奈良時代前期に盛行した伽藍配置と回廊外に塔を独立させた国分寺式の伽藍配置の二様相で理解し、これらに瓦類の様相も加味し、氏寺(前身寺院)の改作による国分寺の造営、ならびに造寺に際して受けた中央からの援助について言及している(八賀1978)。国分寺建立の諸相を説明しようとする興味深い試みとして評価すべきであろうが、古式の瓦の使用認定や前身寺院の存在証明は慎重にならざるを得ない。

国分寺の伽藍配置に対する研究は豊富な蓄積があるが、ここでは本稿に大きくかわる国分寺の回廊の役割、形式に触れた研究をみておく。

7世紀段階の回廊を「行道」の場とし、8世紀以降、金堂前庭が主要な儀式の場となり、回廊はその控えの場となる。回廊の儀式性は薄れ、おもに聖域の閉塞施設として機能するようになると位置付けている(上原2006)。また、回廊内の空間が聖域に近いものであつて、回廊がどの建物と結節するかでは伽藍配置計画の考え方が異なると考え、その分類を行っている(太田1979)。中門を発した回廊がどの建物を結び、どの建物を囲んで回廊が閉じるかは、伽藍の中で塔がどこに配置されるかと有機的に結びついて、伽藍配置を考える上では重要となるこ

とがわかる。

回廊形式については、飛鳥寺・川原寺・法隆寺・大官大寺・四天王寺など、白鳳時代までのものはみな単廊で、平城京内の諸大寺はみな複廊である。地方の諸寺はほとんどが単廊であるが、信濃・遠江の国分寺、三河の国分尼寺は複廊で、多賀城廃寺のように、単に築地をめぐらしただけのものもあるとされている（宮本1979）。国分寺国分尼寺の回廊形式は、多くの場合、国分寺に複廊が多く、これに対し国分尼寺に単廊が多いが、もとより例外もあるとしている（斎藤1996）。国分寺は複廊、国分尼寺は単廊と割り切って考えられがちであるが必ずしもそうではないと認識されているように、実際には、複廊あるいは単廊、それ以外に築地塀や掘立柱式など、伽藍配置と同じように、回廊形式にも多様性が認められるのである。さらには、三河では国分寺国分尼寺とも複廊であるし、信濃は国分寺が複廊、国分尼寺が単廊と異なる形式で建立されている事例もある。

国分寺は聖武朝の国家鎮護の思想を全国的に体现した寺院であるはずで、それ相応の伽藍配置、回廊形式をとるべきである。すなわち、伽藍配置は回廊外に塔を配置する大安寺式・東大寺式、かつ回廊は複廊であってしかるべきであろう。しかしながら、伽藍配置、回廊形式には諸国で多様性が認められるのである。この多様性を生じた歴史的背景について、諸国国分寺の伽藍配置、回廊形式を詳細に検討して導き出していく必要がある。

3. 国分寺の伽藍配置の分類

回廊形式を検討する前に、国分寺の多様な伽藍配置について分類し、整理しておく。調査例の多い国分寺に絞り、国分尼寺は除外して比較を行う。また、総国分寺である東大寺、恭仁宮の大極殿を施入されて建立された山城国分寺、紫香楽の甲賀寺が国分寺となった近江などはその建立経緯が特殊であることは考慮に入れなければならない。一方で、能登国分寺は承和10（843）年に定額寺をもって国分寺となしているの、加えて考慮が必要である。国分寺の伽藍配置については、これまで斎藤忠、近年では山路直充によってその分類案が示されているが（斎藤1972・山路2008）、本稿でも分類案を提示する。

まず、文献資料から国分寺の伽藍配置を規定する要素についてみておきたい。

建物の配置に関しての記述は見当たらないが、『続日本紀』天平13年3月条には「宜令天下諸国各敬造七重塔一区」ならびに「朕又別擬写金字金光明最勝王経、每塔各令置一部」とあり、国分寺には七重塔一基を造り、塔ごとに金光明最勝王経を一部置くように命じられていることがわかる。すなわち、発掘調査された各国分寺跡の遺構でも塔が一基しか認められないことが物語るよう

に、国分寺は単塔式であったであろうことが確認される。そして、同じく『続日本紀』天平13年正月条に「三千戸施入諸国国分寺、以充造丈六仏像之料」とあり、丈六の仏像の造営料の記載があり、当然のことであるがその仏像を納める仏殿である金堂を建てる必要があった。『続日本紀』天平19年11月条には、「限来三年以前、造塔・金堂・僧坊悉皆了」とあって、今後三年のうちに、塔と金堂と僧坊を造り終えよという造営催促を行っている。したがって、国分寺の伽藍には最低限として塔、金堂、僧坊の建物が造られなければならないことがわかるが、一方でその配置までは規定されていない。さらに、これら文献上では平城京の薬師寺・大安寺・東大寺・西大寺でみられるような、塔を二基配した伽藍は国分寺には求められていなかったであろうことが想定される。つまり、単純に平城京諸大寺に代表される伽藍配置の呼び方をもって国分寺の伽藍配置を位置付けることは難しいということがいえよう。

そこで、国分寺の伽藍配置について先行研究でも重要な指標となった塔一基および金堂の位置と回廊の関係に注目して三大別する。すなわち、塔が回廊外に配置されるものをⅠ式、金堂の前方に置かれた塔が回廊内の中心軸から東または西に偏って配置されるものをⅡ式、回廊内で塔と金堂が東西に並置されるものをⅢ式に分類する。表1に各国の伽藍配置の分類を示した。

Ⅰ式

塔を回廊外に配置したものである。

塔は、回廊外の東あるいは西に位置し、その中で北寄り・南寄りに位置するものなど様々である。須田が指摘するように、塔を東に金堂を西に心心に合わせて並置する陸奥国分寺や近江国分寺、逆に塔を西に金堂を東に心心に並置する但馬国分寺がある（須田2011）。一方で、大安寺のように南門外に塔を配置するものではなく、興福寺や元興寺のように、南門で圍繞された区画内の回廊外の南東近くに配置するものがある。

回廊は取り付く建物が不明な場合も多いが、中門から発し金堂に取り付くものと金堂を囲んで講堂に取り付くものがある。

以下に、Ⅰ式について回廊が取り付く建物が金堂（A）あるいは講堂（B）であるか、塔が回廊の東（a）あるいは西（b）にあるかによって細別する。

ⅠA a式 中門を発し金堂に取り付く回廊外の東に塔を配置する。陸奥・常陸・下野・佐渡・播磨・美作の各国分寺が該当する。塔が東に位置することは判明しているが、回廊の接続する建物が不明なものもあるため、この類型をとる国分寺はさらに増える。

ⅠA b式 中門を発し金堂に取り付く回廊外の西に塔を配置する。伊豆・遠江・三河・伊賀・但馬・安芸の各国

表1 伽藍配置の分類

区分	国名	伽藍配置	天平勝宝8年 26カ国
東海道	尾張	I A a	
東海道	常陸	I A a	
東山道	下野	I A a	
東山道	陸奥	I A a	
北陸道	佐渡	I A a	
山陽道	播磨	I A a	
山陽道	美作	I A a	○
東海道	伊賀	I A b	
東海道	三河	I A b	
東海道	遠江	I A b	
東海道	伊豆	I A b	
山陽道	安芸	I A b	○
山陰道	但馬	I A b	○
東海道	伊勢	I A	
東山道	信濃	I B a	
山陽道	備前	I B a	○
山陰道	出雲	I B a	○
山陽道	長門	I B b	○
東海道	武蔵	I C	
畿内	山城	I a	
畿内	河内	I a	
東山道	近江	I a	
北陸道	若狭	I a	
山陰道	伯耆	I a	○
東山道	上野	I b	
東海道	甲斐	II A a	
東海道	上総	II A a	
東山道	美濃	II A a	
南海道	讃岐	II A a	○
西海道	筑前	II A a	
西海道	筑後	II A a	○
西海道	肥前	II A a	○
西海道	日向	II a	○
西海道	豊後	II A b	○
南海道	紀伊	II B a	○
南海道	淡路	II B a ?	
北陸道	能登	III a	
山陽道	備後	III a	○
山陰道	丹波	III a	○
東海道	相模	III b	
東海道	下総	III b	

分寺が該当する。

I B a 式 中門を發し講堂に取り付く回廊外の東に塔を配置する。信濃・備前・出雲の各国分寺が該当する。

I B b 式 中門を發し講堂に取り付く回廊外の西に塔を配置する。長門国分寺がこの伽藍配置と考えられている。

I C 式 上記のI A, B 式に該当しないが、回廊外に塔が配置されるものがあり、I C 式とする。武蔵国分寺は中門からのびる一本柱塀と素掘り溝で区画された中に金堂・講堂・鐘樓・経藏・東西両僧坊を配置し、この区画外の南東に塔が位置する。いわゆる礎石建ちの回廊は存在しない。

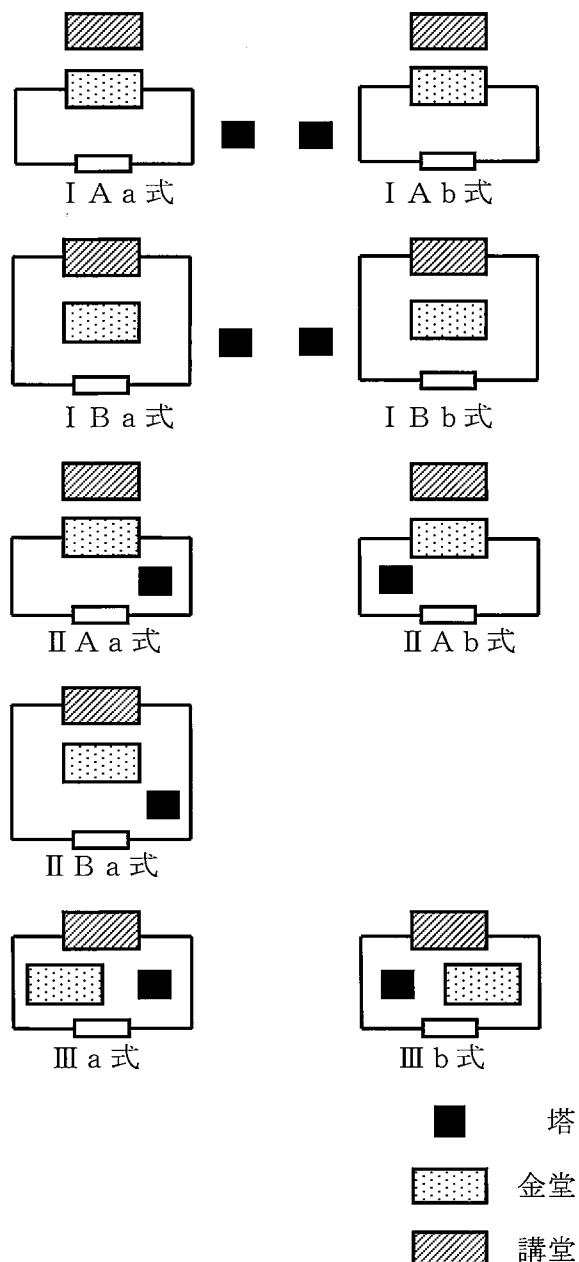


図1 伽藍配置の分類 模式図

II 式

金堂の前面に置かれた塔を回廊内の中心軸から東または西に偏って配置したものである。

以下に、II 類について回廊が取り付く建物と回廊内に配置される塔の位置によって細別する。

II A a 式 中門を發し金堂に取り付く回廊内の東側に塔を配置する。いわゆる大官大寺式で上原分類A 3 型にあたる⁴⁾。上総・甲斐・讃岐・筑前・筑後・肥前の各国分寺で認められる。

II A b 式 中門を發し金堂に取り付く回廊内の西側に塔を配置する。上原分類A 4 型にあたる。豊後国分寺で確認されている。

Ⅱ B a 式 中門を發し講堂に取り付く回廊内の中央北側に金堂、金堂前面東側に塔を配置する。上原分類 C 5 型にあたる。紀伊国分寺において認められる。また、淡路国分寺も同様の伽藍配置が推定されており、隣接国分寺間として紀伊と淡路の関係性が指摘されている（西口 1993・菱田 2008）。

Ⅲ 式

回廊内で塔と金堂を東西に並置したものである。

Ⅲ a 式 中門を發し講堂に取り付く回廊内の西に金堂、東に塔を配置する。法起寺式で、上原分類 C 2 型である。能登・備後・丹波国分寺が該当する。なお、前述のように能登国分寺は既存の定額寺を昇格して国分寺となしているため、建立の時期が異なる。

Ⅲ b 式 中門を發し講堂に取り付く回廊内の西に塔、東に金堂を配置する。いわゆる法隆寺式で、上原分類 C 3 型である。下総・相模国分寺が該当する。

以上のように国分寺の伽藍配置を 10 形式に分類した。

まず、すべての形式で塔の位置については回廊中軸線の西あるいは東、金堂の真横、中門寄りなど様々で特定の場所があったわけではない。したがって、国分寺の単塔式伽藍において、塔の東西もしくは南、北寄りの位置は定まっていなかったことが指摘できる。ただし、須田が指摘しているように、意識的に回廊外の塔を金堂の心で並置するものが確実にある。塔の位置は、回廊の外であ

るか回廊の内であるか、さらに回廊の内でも金堂の横に配すか、前方に配すかが分類に大きな意味をもつと考えられる。割合としては、Ⅰ・Ⅱ式が多数派で、Ⅲ式は少数派となる。Ⅰ式では、中門を發し金堂に取り付く回廊をもつⅠ A 式が多い傾向が認められる。一方、Ⅱ式では大官大寺式のⅡ A a 式が多いことがわかる。

4. 国分寺の回廊形式

古代寺院の回廊形式には、単廊と複廊がある。その中で、国分寺国分尼寺においては、回廊そのものが検出されていなかったり、礎石や根石が残っていなかったりすることが多いが、回廊形式について検討し、その伽藍配置との関係性をみていきたい⁵⁾。表 2 に回廊の検出された国分寺国分尼寺を示した。

複廊

備前国分寺は原位置で礎石が良好な状態で遺存しており、柱間 9 尺等間・基壇幅 30 尺の複廊が講堂に取り付く。陸奥・信濃・三河の各国分寺と三河国分尼寺は礎石抜取り穴あるいは根石から複廊であることが確実である。三河国分寺国分尼寺は柱間 10 尺等間、陸奥国分寺は 8 尺等間であり、基壇幅は 28 ～ 30 尺を測る。そして、常陸・遠江・美作国分寺は基壇幅の広さから複廊の可能性が指摘されている⁶⁾。つまり、上部が削平され礎石や根石が残っていなくとも、残存する基壇の幅が 28 ～ 30 尺（約

表 2 国分寺国分尼寺の回廊形式

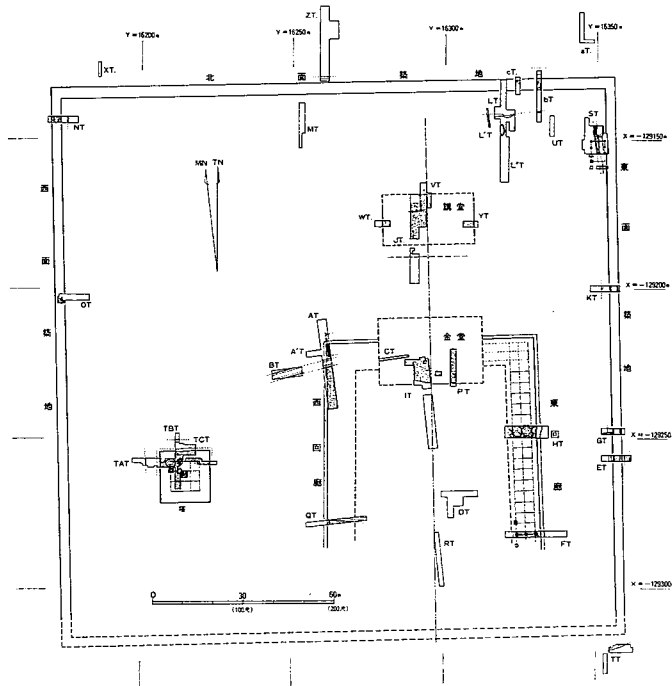
区分	国名	伽藍配置	回廊形式	基壇規模		梁行柱間		備 考
				尺	m	尺	m	
東海道	三河	Ⅰ A b	複廊	約 30	約 9	10		礎石抜取り穴
東海道	三河尼		複廊	28	8.3	10		礎石抜取り穴
東海道	遠江	Ⅰ A b	複廊か		約 10			基壇幅から複廊と推定
東海道	常陸	Ⅰ A a	複廊か		9 以上			複廊の可能性、一部礎石残存
東山道	信濃	Ⅰ B a	複廊		8.1	8.5	2.55	根石
東山道	陸奥	Ⅰ A a	複廊			8	2.4	大部分は根石
山陽道	美作	Ⅰ A a	複廊か	28	8.3			基壇幅から複廊と推定
山陽道	備前	Ⅰ B a	複廊	30	8.91	9	2.67	礎石
東海道	上総尼		単廊	20		12.5		当初礎石建、平安時代掘立柱
東山道	近江	Ⅰ a	単廊					礎石・掘立柱のセット
東山道	信濃尼		単廊	24.4	7.4	10.85	3.3	根石
東山道	下野	Ⅰ A a	単廊			16	4.8	
東山道	下野尼		単廊か					基壇幅から単廊と推定
北陸道	佐渡	Ⅰ A a	単廊			11		礎石
山陰道	但馬	Ⅰ A b	単廊か		6.84			基壇幅から単廊と推定
南海道	讃岐	Ⅱ A a	単廊か		約 6.4			基壇幅から単廊と推定
東海道	相模	Ⅲ b	単廊か			18	5.3 ～ 5.4	北・南面：単廊 東面：築地塀
東海道	武蔵	Ⅰ C						一本柱塀（瓦葺）
東海道	上総	Ⅱ A a	単廊か		6			現状、掘立柱式
北陸道	能登	Ⅲ a	単廊か		約 6			掘立柱式
山陰道	丹波	Ⅲ a	単廊か		約 7.2	10	約 3	南面：単廊か 東面：築地塀
山陰道	伯耆	Ⅰ a	単廊か			10	3	掘立柱式
西海道	日向	Ⅱ a	単廊			10		掘立柱式
西海道	薩摩	a	単廊					掘立柱式

8.3～8.9m) 以上あれば複廊の可能性が非常に高くなる
 といつてよい。

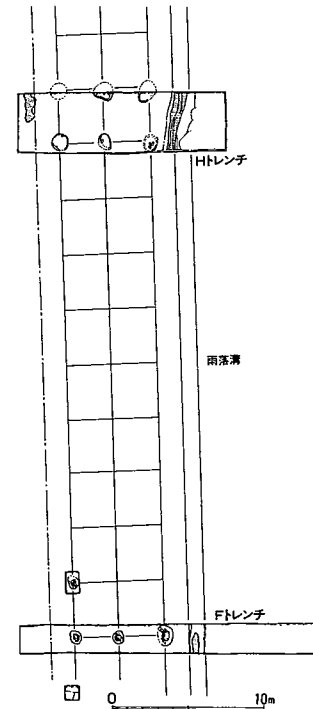
複廊形式の回廊が想定される国分寺の伽藍配置をみて
 みると、陸奥・常陸・美作はI A a式、三河・遠江がI

A b式、信濃・備前がI B a式である。したがって、複
 廊を採用したのは、塔を回廊外に配置するI式の伽藍配
 置をとる国分寺に限られるようである。

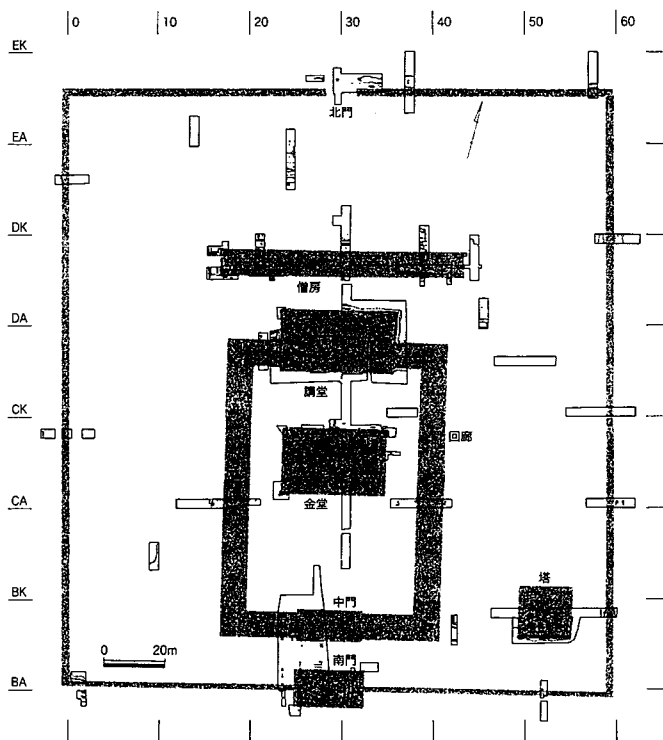
国分尼寺における回廊調査が進んでいない中、国分寺



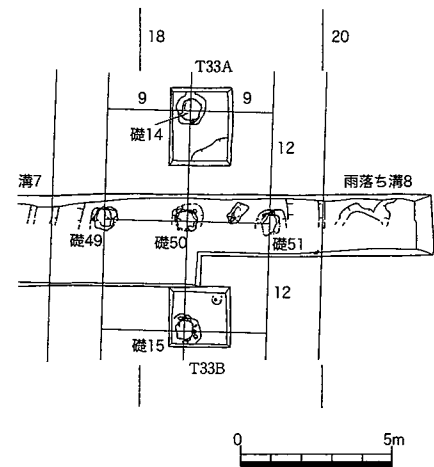
1 三河国分寺 伽藍配置 (I A b式)



2 三河国分寺 東面回廊



3 備前国分寺 伽藍配置 (I B a式)



4 備前国分寺 西面回廊

図2 複廊の国分寺 (1・2前田ほか1989 3・4有賀ほか2011)

国分尼寺とも複廊であるのは現状で三河のみで、別々の回廊形式をとったのは信濃である。

単廊

単廊には、礎石建ちと掘立柱のものが認められる⁷⁾。

佐渡国分寺は礎石から柱間11尺の単廊が金堂に取り付くことが判明している。下野国分寺は幅広の柱間16尺の単廊が検出されており、信濃国分尼寺も根石の痕跡から単廊である。上総国分尼寺は当初礎石建ちだったものが、平安時代に掘立柱の単廊になったとされる。また、上総・能登・伯耆・日向・薩摩の国分寺では現状で掘立柱式の単廊が検出されている。相模国分寺においては、北・南面は単廊⁸⁾、東面は築地塀により区画されていたことがわかっている。

複廊と同様に、但馬・讃岐国分寺は礎石、根石が遺存せず基壇のみの検出であるが、その幅から単廊が推定されている。

このように単廊形式の回廊をもつ国分寺の伽藍配置は、下野・佐渡がⅠA a式、但馬がⅠA b式、讃岐・上総がⅡA a式である。日向国分寺は単廊が取り付く建物が不明であるが、Ⅱ式である。また、能登はⅢa式、相模はⅢb式をとる。したがって、単廊をもつ国分寺はⅠ～Ⅲ式までのすべての形式において認められ、かつ礎石建ちと掘立柱式のものがある。

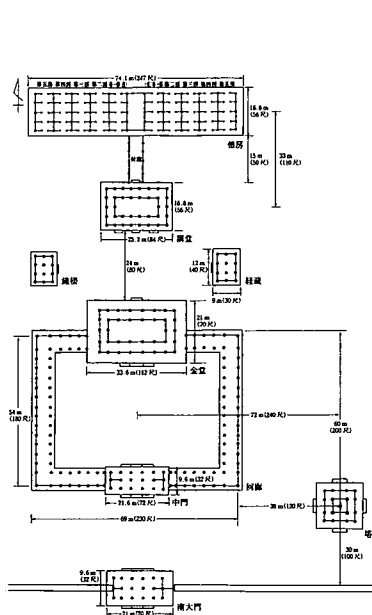
その他

武蔵国分寺では回廊状に一本柱塀が圍繞していたことが判明している⁹⁾。さらに、単廊として前述した相模国分寺は、北・南面が単廊、東面が築地塀という構造である。同じく、丹波国分寺も南面は回廊と思われるが、東面で築地塀へと構造が変化すると考えられている。伽藍配置は、丹波がⅢa式、相模はⅢb式である。

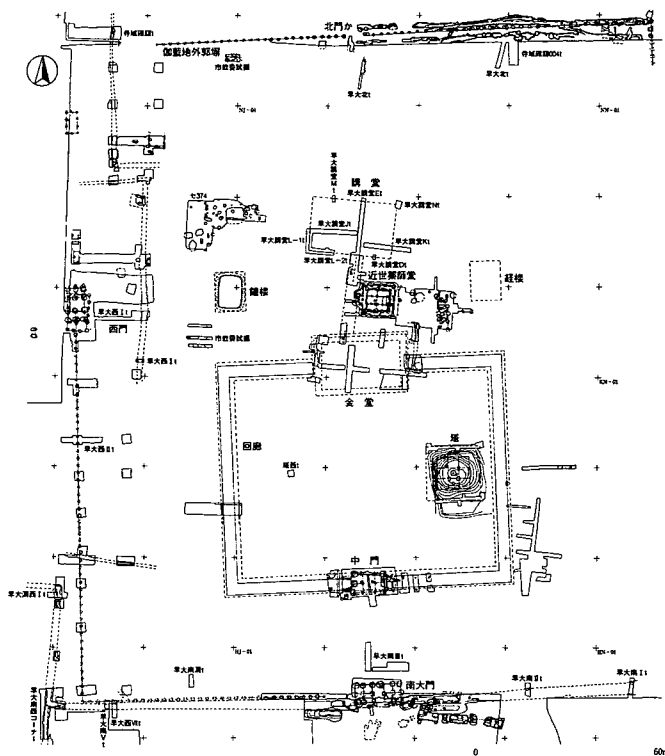
以上、回廊形式についてみてきた。現在発掘調査などで判明している回廊では、礎石建ちの単廊と複廊のみ比較すれば、数量的にはそれほど変わらない。しかしながら、複廊はⅠ式の伽藍配置をとるものにしか採用されていない。さらに、ⅠC・Ⅱ・Ⅲ式の伽藍配置をとるものには掘立柱式・築地塀による区画施設が広く認められることが確認された。

5. 回廊形式と伽藍配置

国分寺の伽藍配置の多数派を占めるものはⅠ式あるいはⅡ式で、回廊内において塔と金堂が東西に並置しない形式の伽藍配置である。また、Ⅰ式およびⅡ式の中では回廊が中門と金堂を結節する形式(A)が半数以上を占め、回廊が区画する空間は金堂とそこで行われる儀式に伴って形成されていると考え得る。金堂を囲んで閉じる回廊形式(B)においても同じことがいえ、塔と金堂の

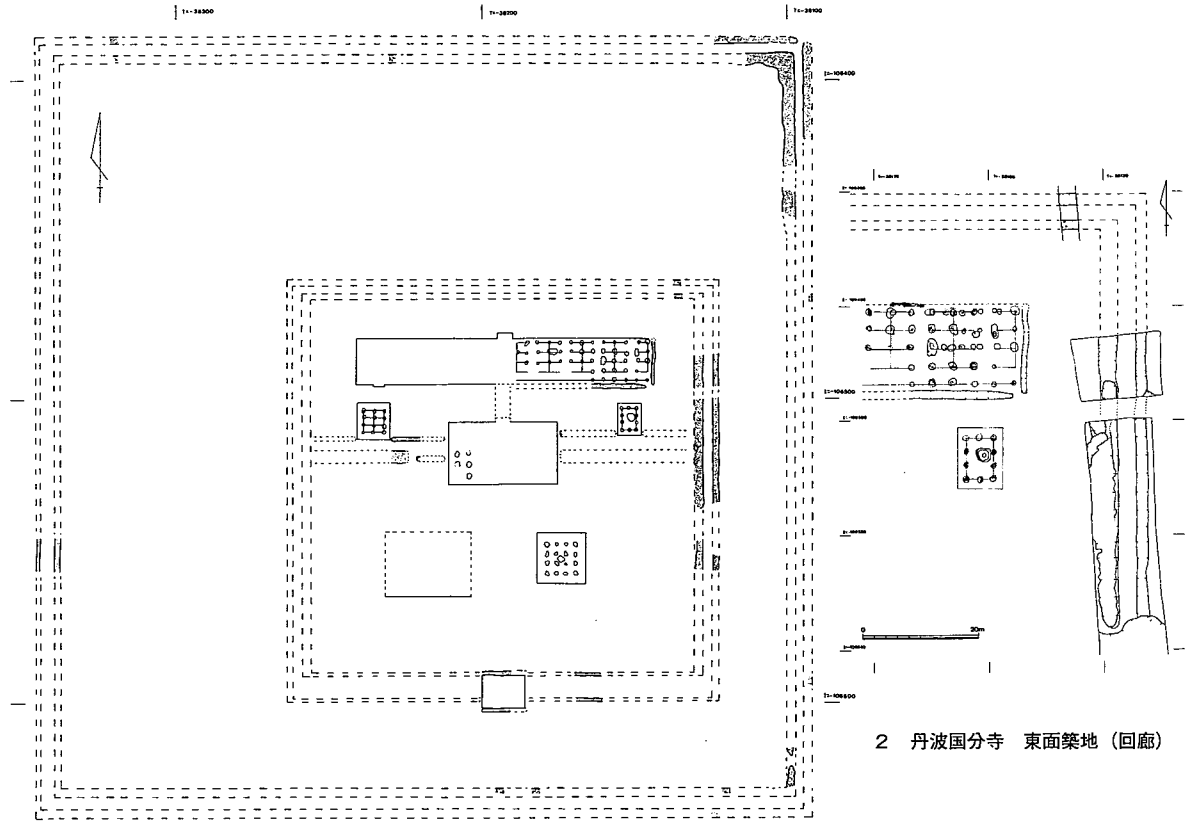


1 下野国分寺 (ⅠA a式)



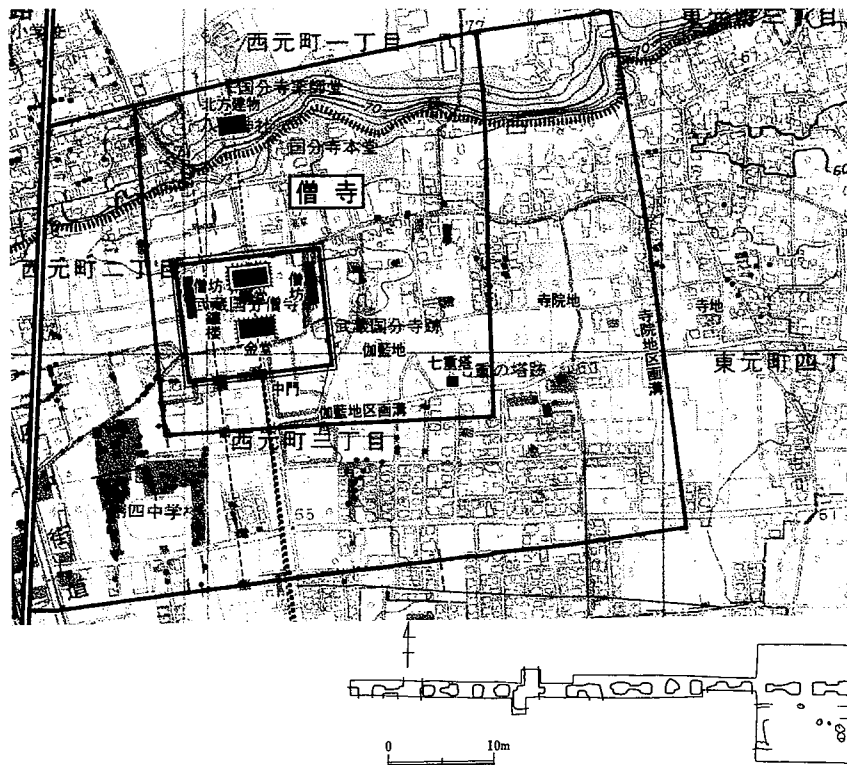
2 上総国分寺 (ⅡA a式)

図3 単廊の国分寺 (1 山口2011 2 市原市教育委員会2009)



1 丹波国分寺 伽藍配置 (Ⅲ a 式)

2 丹波国分寺 東面築地 (回廊)



3 武蔵国分寺
伽藍配置 (I C 式)

4 武蔵国分寺 南面一本柱塀・中門

図4 その他回廊の国分寺 (1・2中澤2003 3府中市教育委員会・国分寺市教育委員会編2006 4滝口1991)

二建物を囲むⅢ式をとる国分寺の割合は低い。

日本列島におけるⅠ式の伽藍配置は平城京遷都と同年の和銅3(710)年に造営が始まったとされる興福寺の伽藍以降にみられ¹⁰⁾、平城京諸大寺においては、元興寺・唐招提寺などにも認められる。同様に塔を回廊外に配す二塔式の伽藍は、大安寺・東大寺・西大寺で認められる。Ⅰ式は平城京諸大寺に通有な伽藍配置であり、天平13年に建立の詔のあった国分寺に採用された伽藍配置として最もふさわしい形式といえよう。

同じく複廊形式の回廊の採用は、平城京遷都後のある段階に認められる。わかりやすい例でいえば、藤原京本薬師寺は単廊であったが、同一の伽藍で建てられた平城京薬師寺は複廊に変更されている。この薬師寺の複廊下層には単廊の礎石据え付け痕跡が確認されており、当初は本薬師寺と同じ単廊であったものが、設計変更され複廊とされたことがわかっている。田辺征夫は、養老2(718)年に唐から帰国した道慈が大安寺にもたらした新しいスタイルの伽藍がこの設計変更に大きな影響をあたえたと考えている(田辺1999)。「新都城にふさわしく、かつ国家鎮護の法要儀式をより大規模に行なえる伽藍が道慈によってもたらされ、大安寺をはじめとする他の大寺が次々と新伽藍の建設をはじめたため、その動きにでききるだけ呼応しようとしたからではないか」とも述べている。このように興福寺・元興寺・東大寺なども複廊である。複廊が採用された国分寺は、ⅠAもしくはⅠB式の伽藍配置をとっており、これらの伽藍は、平城京内においてもみられるように国家鎮護の思想に合致したもので、国分寺建立時にふさわしいものといえる。

一方で、飛鳥時代からの伝統的な単廊はⅠ～Ⅲ式すべてでみられ、さらに掘立柱式も存在する。そのうち、回廊内において金堂前面の、中軸線より東に偏って塔を配すⅡA a式は、文武朝の大官大寺式であるが、平城京では認められず、やはり白鳳期の要素が強い。二塔式でいえば、平城京薬師寺で採用されているが、国分寺では一塔式のⅡ式はいわゆる大官大寺式のⅡA a式だけでなく回廊中軸線より西に塔をもつⅡA b式や回廊が講堂に取り付くⅡB b式というバリエーションをもつため、むしろ奈良時代の国分寺で広く採用された形式といってもよいかもしれない。つまり、白鳳期に取り入れられた形式で、奈良時代に国分寺で展開した伽藍配置であったと位置付けられよう。一つ注目しなければならないのは、Ⅱ式の伽藍配置をもつ国分寺が南海道と西海道に多く認められることである。Ⅲ式においては、東面に築地塀を用いる例があることから、Ⅰ・Ⅱ式の伽藍配置の回廊形式と異なることに注意しなければならない。

以上のように、複廊は国家鎮護の思想のもと国分寺建立時の伽藍配置および寺院建築様式を反映したものといえ、単廊はそれ以前の伝統的な伽藍や建築様式にも伴う。

では、複廊の採用はどうして行われたのであろうか。国分寺に関しては、複廊は原則として塔を回廊外に配すⅠ式の伽藍に伴う。Ⅰ式には、陸奥国分寺などにみられるように、金堂院とは別に塔院として回廊をめぐる事例があり¹¹⁾、塔が回廊から出て独自にシンボル化されるようになっている。その結果、法会などの中心施設である金堂院もさらに回廊を荘厳化する必要があったのではないだろうか¹²⁾。複廊をもつ国分寺が、延喜式にみられる上国以上の国々であり、一定の格式をもっていたことがうかがえる。これは、田辺征夫が述べているように、平城京内の諸寺院での新たな伽藍の建設において、塔が回廊外へ配置され、複廊が採用されたことに影響を受けて諸国の国分寺が造営されたということであろう。

6. おわりに

回廊形式を一属性として国分寺の伽藍配置について検討を行った。その結果、複廊をもつⅠA・B式は国分寺建立時に最もふさわしい伽藍配置であったことが導き出された。その一方で、それ以前の伝統を受け継いだ伽藍と回廊を有する国分寺もまた建立された。『続日本紀』天平勝宝8(756)年12月条には、聖武天皇の一周忌に必要な道具が26カ国に頒下されたとあるが、その26カ国にはⅠA a・ⅠA b・ⅠB a・ⅡA a・ⅡA b・ⅡB a・Ⅲ aの各形式の伽藍配置の国分寺が含まれる¹³⁾。そのため、伽藍配置に関係なく国分寺として認められていたものであり、国分寺の伽藍造営は中央政府からの一方的な命令によるものだけでなく、各国の情勢によって進められたようである。

最後に、国分寺造営における伽藍配置の多様性の背景に近づく視点について触れることでまとめたい。中央政府から一斉にその造営が命じられたものの、それぞれの国の事情からバリエーションをもって成立した国分寺は、その当時の国内、各国同士の関係を語る重要な資料である。そのうち、複廊をもつⅠB a式の備前国分寺は、創建瓦の検討からその建立に際し国分寺瓦屋を創設したと想定されるが、伽藍の造営においても最新のものを採用したと考えられる。また、五畿七道という枠組の中での関係として南海道の隣接国である紀伊から淡路へ造瓦技術の伝播とともに伽藍配置の設計施工の関与が指摘されている(菱田2008)。このように国分寺伽藍の造営背景に関しては、国同士の相互関係など個別の造営事情について、より一層の検討が必要である¹⁴⁾。これらについては、今後の課題であるが、本稿がその手がかりを示すことができたなら幸いである。

最後になりましたが、小稿を執筆するにあたり、岡山理科大学亀田修一教授に大変有益なご教示をいただきました。厚くお礼申しあげます。

註

- 1) 伽藍外を含めた広範な発掘調査の進展により、寺院空間についての研究・議論が活発となっている（山路2001・2011）。講師院や大衆院などの維持運営諸施設の想定がなされている国分寺もみられる。
- 2) 三輪嘉六も「国分寺の造営は八世紀における最も先進的な新しい構想に基づいた仏教活動であり、「国華」とさえみなされた国家的事業であればこそ、流行の最先端をゆく伽藍の構成を採用したはずである」とし（三輪1980）、それにもかかわらず旧形式の伽藍配置をもつ国分寺が存在することを問題視している。
- 3) この他、塔は雷火の被害を最も受けやすい構築物であり、雷火による火災で伽藍全体が灰燼に帰すことになりかねないものであったと述べられている（小笠原2011）。伊藤延男も「塔を離すことは落雷の被害を最小限度に食い止める現実的効果があったにちがいない。」としている（伊藤1984）。塔が伽藍中心域から回廊外に配された、一つの具体的な理由かもしれない。
- 4) 上原真人が行った分類（上原1986）と合致するものは、上原分類〇〇型として併記している。
- 5) 本稿では回廊形式についてののみ検討しているが、回廊の金堂・講堂への取り付け位置についての論考もある（大川1994）。さらに、取り付く中門の構造も加味して比較すると興味深い。今後検討の必要がある。
- 6) 常陸国分寺の回廊が単廊である想定を再検討した結果、複廊の可能性が高いと考えられている（曾根2011）。回廊の基壇幅は9mを超えるとされる。
- 7) 近江国分寺の回廊は礎石と掘立柱をセットとする特異な単廊であった可能性が高いとされている（畑中・大道2011）。
- 8) 礎石や根石から単廊と推定されているが、梁行柱間5.3～5.4mと幅が広いため、複廊との見方もあるようである。ただし、梁行中央には柱列の存在を示す痕跡は認められなかったとされる（大岡1991）。
- 9) 回廊には、地方では柵列・土塁・築地など簡素な囲障であった例が意外に多いことが指摘されている（鈴木1974）。
- 10) 興福寺の造営年代については、『興福寺縁起』が和銅3（710）年に「都を平城に定む。是に太政大臣先志を相承け、春日の勝地を簡び、興福の伽藍を立つ」としているが、遷都にともなって興福寺を営んだということの意味し、その時に造営が開始されたとは必ずしもいえないとされる（館野2010）。遷都にやや遅れて造営が始まったというのが妥当なところであるようである。
- 11) 同じように、平城京内の興福寺なども回廊と門で区画された塔院が存在する。
- 12) 複廊の採用には建築上の理由もあったであろうが、今後の検討課題としたい。
- 13) 26カ国には、北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道の国々しか含まれず、畿内や東山道などの国々は含まれていない。
- 14) 森郁夫は、国分寺造営が国守の責任で進められたことから、遺構遺物から取り上げることができる国守について言及して

おり注目される（森2009）。さらに、複廊をもつI B a式の信濃国分寺は、軒平瓦が平城京出土軒平瓦6734型式C種と同范であることから、「造西隆寺司」に属する瓦工の一部を派遣して造瓦を行った可能性が指摘されている（山崎2006）。そして、その造営・完成が西大寺や西隆寺と同じく、道鏡の全盛期（765～770）になされた可能性がさわめて高いとされている。

参考文献

- 伊藤延男 1984「天平の寺院建築」『全集日本の古寺』11東大寺・新薬師寺 集英社
- 上原真人 1986「仏教」『岩波講座日本考古学』4集落と祭祀 岩波書店
- 上原真人 2006「平城京・平安京時代の文化」『列島の古代史ひともの・こと』8古代史の流れ 岩波書店
- 大岡実 1966『南都七大寺の研究』中央公論美術出版
- 大岡実 1991「相模」『新修国分寺の研究』2畿内と東海道 吉川弘文館
- 大川敬夫 1994「古代寺院の回廊について―特に講堂・金堂へのとりつけ位置についての試み―」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会
- 太田博太郎 1979「南都六宗寺院の建築構成」『日本古寺美術全集』2法隆寺と斑鳩の古寺 集英社
- 小笠原好彦 2011「本薬師寺の造営と新羅の感恩寺」『日本古代学』3明治大学日本古代学・教育研究センター
- 斎藤忠 1972「国分僧寺跡・尼寺跡の研究の課題」『日本歴史』288吉川弘文館
- 斎藤忠 1996「国分寺跡の規模と建物」『新修国分寺の研究』6総括 吉川弘文館
- 鈴木嘉吉 1974「寺院一伽藍の構成と配置」『古代史発掘』9講談社
- 須田勉 2011「国分寺と七重塔」『国分寺の創建』思想・制度編 吉川弘文館
- 曾根俊雄 2011「常陸国分寺の回廊」『茨城県考古学協会誌』23茨城県考古学協会
- 館野和己2010「平城京の寺々」『平城京の時代』古代の都2 吉川弘文館
- 田辺征夫 1999「都城の大寺―大官大寺と薬師寺」『古代を考える 古代寺院』吉川弘文館
- 田村圓澄 1981「国分寺創建考」『南都佛教』46 南都佛教研究会
- 西口和彦 1993「寺域と伽藍配置」『淡路国分寺』三原町埋蔵文化財調査報告2三原町教育委員会
- 畑中英二・大道和人 2011「近江国分寺」『国分寺の創建』思想・制度編 吉川弘文館
- 八賀晋 1978「国分寺建立における諸様相」『日本古代の社会と経済』下巻 吉川弘文館
- 菱田哲郎 2008「国分寺と窯業」『シンポジウム国分寺の創建を読むⅡ―組織・技術編―』国士舘大学
- 府中市教育委員会・国分寺市教育委員会編 2006『古代武蔵の国府・国分寺を掘る』学生社
- 宮本長二郎 1979「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」『日本古寺美

術全集』2 法隆寺と斑鳩の古寺 集英社
 宮本長二郎 1984「古代寺院の伽藍配置」『全集日本の古寺』14 飛鳥・南大和の古寺 集英社
 三輪嘉六 1980『日本の美術』171 国分寺 至文堂
 森郁夫 1998「伽藍配置変化の要因」『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版局
 森郁夫 2009「国分寺造営時の国守」『日本古代寺院造営の諸問題』雄山閣
 山崎信二 2006「平城京内出土軒瓦と信濃国分寺出土軒瓦」『古代信濃と東山道諸国の国分寺』上田市立信濃国分寺資料館
 山路直充 2001「国分寺における寺院地と伽藍地（上）」『古代』110 早稲田大学考古学会
 山路直充 2008「国分寺の空間構成」『シンポジウム国分寺の創建を読むⅠ—思想・制度編—』国士舘大学
 山路直充 2011「寺の空間構成と国分寺—寺院地・伽藍地・付属地—」『国分寺の創建』思想・制度編 吉川弘文館

報告書類

有賀祐史ほか 2011『備前国分寺跡2』赤磐市文化財調査報告5 赤磐市教育委員会
 市原市教育委員会 2009『上総国分僧寺跡Ⅰ』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書8
 伊東信雄ほか 1961『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』宮城県教育委員会
 上田市立信濃国分寺資料館 1982『信濃国分寺跡』
 宇垣匡雅ほか 2009『備前国分寺跡』赤磐市文化財調査報告3 赤磐市教育委員会
 大木丈夫 2011「『石の国分寺』の調査—国指定史跡甲斐国分寺跡」『季刊考古学』117 雄山閣
 河原純之ほか 1984「国指定史跡若狭国分寺跡—環境整備事業報告書—」小浜市教育委員会
 川村尚 2005『佐渡国分寺跡発掘調査報告Ⅲ 伽藍周辺の調査』佐渡市教育委員会
 倉吉市教育委員会 2001『国分寺シンポジウム 天平の華「伯耆国分寺」を大いに語る』
 櫻井康治 1987「筑後」『新修国分寺の研究』5 下 西海道 吉川弘文館
 妹尾周三 2006「安芸国分寺の伽藍配置と変遷」『月刊考古学ジャーナル』545 ニュー・サイエンス社
 高島忠平 1987「肥前」『新修国分寺の研究』5 下 西海道 吉川弘文館
 滝口宏 1991「武蔵」『新修国分寺の研究』2 畿内と東海道 吉川弘文館
 立岡和人ほか 2003『史跡紀伊国分寺跡保存修理事業報告書』打田町教育委員会
 多淵敏樹ほか 1970『史跡播磨国分寺跡発掘調査報告』姫路市教育委員会

土肥富士夫ほか 1994『史跡能登国分寺跡整備事業報告書』七尾市教育委員会
 中澤勝 2003『丹波国分寺跡発掘調査報告書Ⅱ』亀岡市文化財調査報告62 亀岡市教育委員会
 中谷雅治・磯野浩光 1991「山城」『新修国分寺の研究』2 畿内と東海道 吉川弘文館
 八賀晋 1997「美濃」『新修国分寺の研究』7 補遺 吉川弘文館
 濱崎真二ほか 1993『淡路国分寺』三原町埋蔵文化財調査報告2 三原町教育委員会
 林博通 1991「近江国分寺に関連する発掘調査」『新修国分寺の研究』3 東山道と北陸道 吉川弘文館
 榎本誠一 1975「但馬国分寺」『佛教藝術』103 毎日新聞社
 平野吾郎・安藤寛 2011「遠江国分寺」『国分寺の創建』思想・制度編 吉川弘文館
 藤原秀樹・林和範 2002『伊勢国分寺跡2』鈴鹿市教育委員会
 北條献示ほか 2011『尾張国分寺跡発掘調査総括報告書（Ⅰ）』稲沢市文化財調査報告56 稲沢市教育委員会
 前沢和之・高井佳弘 1989『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』群馬県教育委員会
 前田清彦・高垣太一 2006『史跡三河国分尼寺跡保存整備事業報告書』豊川市教育委員会
 前田清彦ほか 1989『三河国分寺跡—史跡三河国分寺跡伽藍・寺域の確認発掘調査報告書』豊川市教育委員会
 松尾忠幸 1996『特別史跡讃岐国分寺跡保存整備事業報告書』国分寺町教育委員会
 松下正司 1997「備後」『新修国分寺の研究』7 補遺 吉川弘文館
 真野和夫 1987「豊後」『新修国分寺の研究』5 下 西海道 吉川弘文館
 水島稔夫 1997「長門」『新修国分寺の研究』7 補遺 吉川弘文館
 筈瀬明宏 2009『日向国分寺跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書56 西都市教育委員会
 湊哲夫ほか 1980『美作国分寺跡発掘調査報告』津山市教育委員会
 宮本敬一ほか 1998『史跡上総国分尼寺跡中門・回廊復元事業報告書』市原市教育委員会
 森田勉 1987「筑前」『新修国分寺の研究』5 下 西海道 吉川弘文館
 山内昭二 1997「伊豆」『新修国分寺の研究』7 補遺 吉川弘文館
 山口耕一 2011「下野国分寺」『国分寺の創建』思想・制度編 吉川弘文館
 山路直充ほか 1994『下総国分寺跡 平成元～5 年度発掘調査報告書』市立市川考古博物館研究調査報告6
 山田猛 1991「伊賀」『新修国分寺の研究』2 畿内と東海道 吉川弘文館

【連絡先：〒709-0816 岡山県赤磐市下市337番地

赤磐市教育委員会】

